

棺・甕棺墓が出土している。袋状竪穴の一つから石製把頭飾はとうしきが出土し、石蓋土壙墓と箱式石棺からそれぞれ銅鏡が出土している。

この遺跡は弥生前期中葉から始まり、中期を中心にして終末期にわたっている。(第27・28・29図参照)

(四) 下稗田遺跡(行橋市下稗田、前田)

大型宅地造成に伴い昭和五十四年(一九七九)より昭和五十九年にかけて発掘調査が行われた。遺跡は京都平野の中央部、上稗田から吉国にかけて南西から北東に連なる低丘陵のほぼ中央部に位置する。

発掘の結果、弥生時代に限れば弥生前期後葉・中期前葉を中心に前期中葉から後期・終末までに及ぶ遺跡で、集落跡・貯蔵穴群・墳墓群・祭祀遺構などが出土している。(第7表、第30・31図参照)

第7表 下稗田遺跡の時期別出土遺跡

時期	住居跡	貯蔵穴	墳墓
前期中葉	8	109	
前期後葉	93	945	石棺6 土壙墓144
中期中葉	41	300	石蓋土壙墓21 土器棺墓106
中期後葉	22	96	祭祀遺構27
後期(古墳初期)	77	12	方形周溝墓1、箱式石棺7、石蓋土壙墓2、土壙墓1、祭祀遺構1

(渡辺正気著『日本の古代遺跡34・福岡県』保育社 一九八七より) 一部改変

四 弥生時代の犀川

犀川町域で現在まで発見されている弥生時代の遺跡は二四遺跡に及んでいるが、そのほとんどが遺物の地表面での採集であったり、土木工事中に偶然発見されてごく簡単な調査しか行われなかったものが多く、犀川町の弥生時代を解明するにはあまりにも資料が乏しかった。

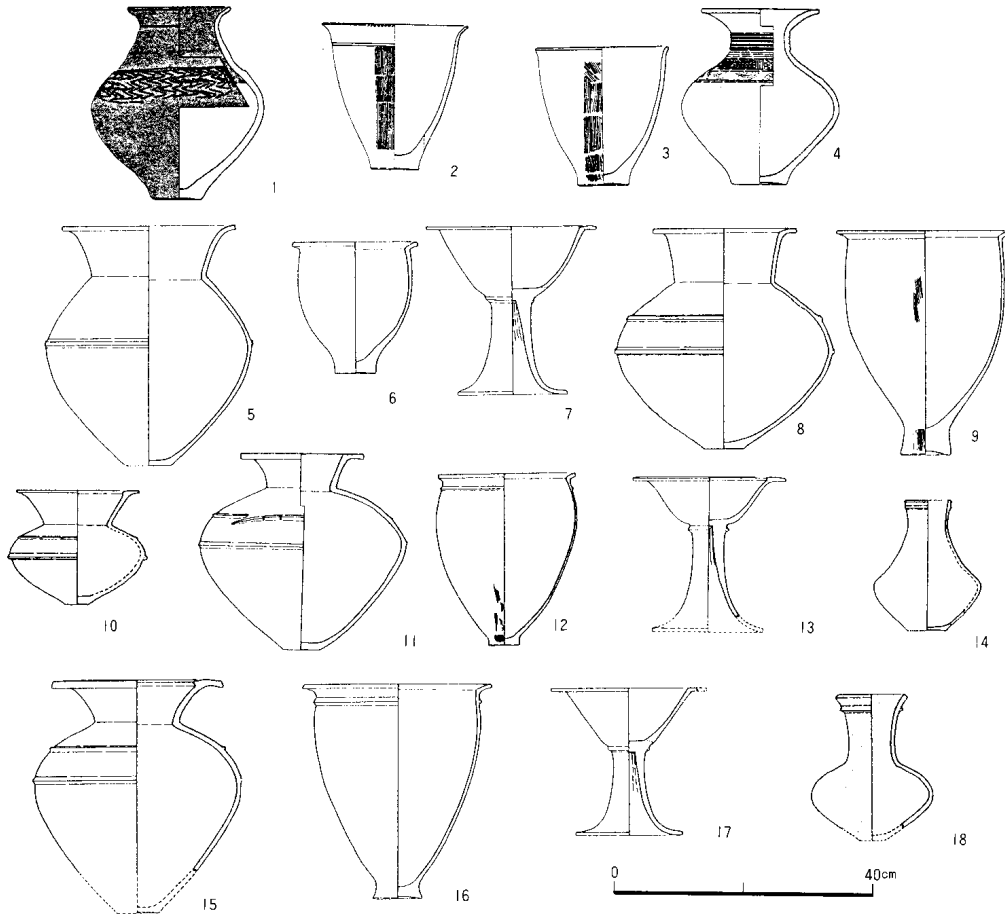
しかし最近になってようやく諸工事に先立って発掘調査が行われるようになり、調査例も増え始めて、ようやく弥生時代の犀川のようすも見え始めてきている。

犀川町域の弥生遺跡は、河岸段丘かんだんきやう・台地や丘陵上からの発見が最も多く、弥生時代の人々がこのような場所を選んで生活していたことを示している。しかもこのような場所は、今川・喜多良川・高屋川・祓川やその他の小河川に面しているか、またはこれらの河川に挟まれた場所に位置している。これは生活に必要な水が容易に得られることや、この時代から本格化してくる水田稲作を行うための低湿地が近くに得やすいことなどが条件になっていたものと考えられる。

犀川町域での最初の本格的な遺跡調査は、昭和二十四年(一九四九)に行われた犀川小学校校庭の弥生遺跡調査であり、京都・行橋地方を含めても発掘調査のさきがけとなった。この遺跡は喜多良川と高屋川とに挟まれた南北に低く長く延びる丘陵の最先端部に所在するものであったが、弥生前期後半から中期後半にわたって営まれた集落跡であった。

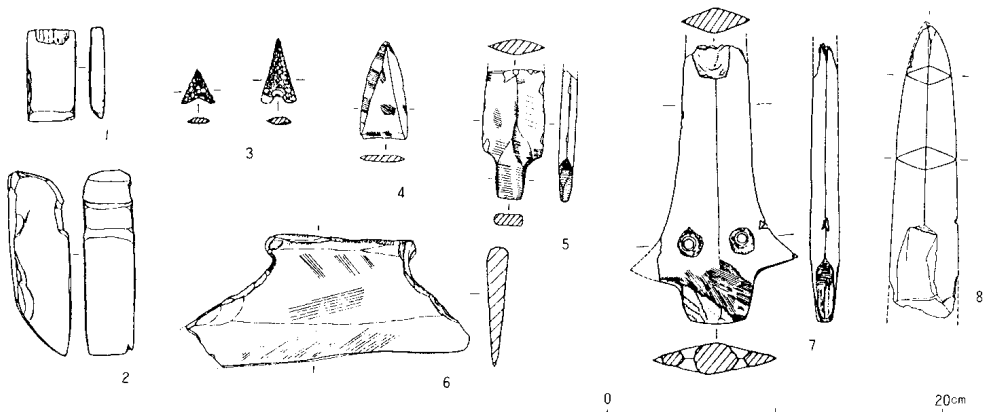
住居跡とそれに付属する貯蔵穴が出土しているが、特に注目されたのは炭化麦の出土であり、この時期既に米作とともに麦の栽培も行われて

第30図 下稗田遺跡出土土器類（一部）



1 (壺)、2 (甕) 前期中ごろ～後半 3 (甕)、4 (壺) 前期末 5 (壺)、6 (甕)、7 (高杯) 中期初頭 8 (壺)、9 (甕) 中期前葉 10、11、14 (壺)、12 (甕)、13 (高杯) 中期前半 15、18 (壺)、16 (甕)、17 (高杯) 中期中葉

第31図 下稗田遺跡出土石器類（一部）



1 扁平片刃石斧 2 抉入片刃石斧 3 打製石鏃 4 磨製石鏃 5 石剣 6 大型石包丁 7 石戈 8 石剣

(第30・31図は「下稗田遺跡」行橋市文化財調査報告書第17集 1985より)

いたことが証明された。

この遺跡から南へ約一・五キロの本庄池南端部までの低丘陵上からはこれまでも住居跡・貯蔵穴・箱式石棺などが数多く確認されており、地理的な諸条件から考えても弥生時代の全時期を通じて犀川町域の中でも中心的な大集落が存在し、それに伴う墓地の営まれたことを窺わせている。また現在の本庄池に当たる部分は、池の築堤がなされる前までは池底のかなりの部分に水田があったと聞いているので、弥生時代においても低湿地が広がっていたはずであり、このあたりがまた稲作地として最適の場所となっていたことも確実であろう。

下高屋から桜台を通過して大熊への道路建設中に幾つかの箱式石棺が出土しているが、そのうちの一基からはほぼ完全な熟年女性の人骨が出土しており、弥生中期のものと推定されているが、この時期この付近一帯に形成されていた農業共同体内で司祭的な性格も持ち合わせていた女性小首長であろうか。(写真9参照)

犀川小学校校庭遺跡とほぼ同じころの遺跡として、最近発掘調査が行われた末江遺跡がある。末江川最上流部の低台地上にあり、住居跡七軒と貯蔵穴などが出土している。住居跡からは石剣や石戈が出土している。

次に祓川に面した遺跡群を見ると、木井馬場地区のタカデ遺跡や寺門遺跡がある。それぞれすぐ近くに祓川を見下ろす河岸段丘上に営まれた集落を中心とした遺跡である。そのうちタカデ遺跡は堅穴住居五軒と箱式石棺墓・甕棺墓・土壙墓からなる遺跡で、時期的には弥生前期から終末期にわたっている。特に前期中ごろから後半と考えられている住居跡出土の甕には籾の圧痕が残っており、さらに稲穂を摘み取る石包丁の出

土していることは、このころ既にこのような内陸部の河川流域の小平野でも稲作の行われていたことを示している。またA区1号箱式石棺からは後期後半から終末期と考えられる副葬品の小型仿製鏡が出土している。これとほぼ同じころの小型仿製鏡が山鹿の石蓋土壙墓や続命院の箱式石棺から出土しており、このころこれらの地域での小首長の萌芽を思わせる。タカデ遺跡から約一・三キロ上流の寺門遺跡では住居跡二軒と土壙墓が出土している。弥生中期の遺跡で、大陸系の石器である抉入片刃石斧が出土している。

ここから南の横瀬・伊良原・帆柱地区からはこの時代の遺跡・遺物はまだ発見されていないが、自然的な諸条件から見るとこの時代この地域での人々の生活が全く無かつたとは考えられず、将来調査の機会があれば発見されていくことは確実であろう。

五 調査された犀川町の弥生時代遺跡

(一) 犀川小学校校庭遺跡(本庄)

高屋川と喜多良川に挟まれて南北に長く延びる丘陵は、本庄付近で崖となつて平野と交わるが、その先端部(犀川小学校運動場北端)に、本遺跡は位置する。古くこのあたりは雨後すぐに円形に乾燥する場所があるといわれてきた。昭和二十四年(一九四九)二月、田頭喬氏(ながはらたかし)(小倉高校教諭)がここを試掘調査して、弥生時代の住居跡があることを確認した。同年四月になつて県の援助のもとに、九州考古学会・県歴史調査委員会の合同調査班により本格的な発掘調査が行われた。報告書は出されていないが、以下二・三の刊行物で掲載された本遺跡の特徴を見ることにす